





昭和四十一年一月廿四日

小長  
說篇  
**出船の唄**  
(10)

(10)

「お止しなさいよ、お母あさん。僕は小学校の地理の説明を求めてゐるんぢやないんです」  
「でも、當世の日本で、一般にラジルに對して持つ知識は妾と同程度よ」  
「勿論。しかし、今の僕は、伯國に於ける邦人將來の發展性……と云ふ問題に、大きな關心を持つ様になつたのです」  
「まあ、六つか七のねえ、あなたは。そんな研究をして、論文でも書く氣なの？」  
「嫌んなつちやふな、お母あさんつたら。茶化しちやいけません。近頃、北米のカルフォールニア州に盛んに日本人が入り込んでゐるでせう？そして、比較的の生存競争激しくない植民地で累種一番奮闘して、今迄に多くの成功者を出してゐると云ふぢやありませんか。今、南米の伯國でも、日本移民を歓迎して、邦人發展の將來性は、實に有望であつて、北米のそれ以上ださうです。現に、近頃段々北米では、勤勉な日本人の入國を嫌ぶ様な氣配が見え出して來たらしく、そのためもあり、一層、今後伯國へ行く人達が多くなる譯です。競争の激しい日本内地で働く積りなら、南米で年たてば、大抵小さい乍らも、地主位にはなれるさうですから有望ひなしです。さあ、それで……」

「その事に言ひ及ぼうとして、思はず太い溜息をついた。  
「それで、あるいは？難ねえ、この子は……話の途中で溜息をついたりなんかしてさ」  
「さ、それがです。先方へ渡るには是非大金が必要なんです。大金がね」  
「それや勿論よ。此處から一萬數千里も距つてゐる所で、丁度日本とは地球の反対側の方にあら、と云ふぢやないの。たくさん船賃のかゝる筈よ」  
「え、二百圓位かゝるんですつてさ」  
「いくらくらかうらうと、妾達にや關係のない事よ。つまらん事を考へずに少しほは勉強なさい。もう、受験願書も提出せんやならん頃ですよ」  
「……」  
妻や平太郎を喜ばせておくれ。早く将校さんになつて、せめて末は、大將とまで行かなくとも佐官位までにはねえ……」

「お止しなさいよ、お母あさん。僕は軍学校の地理の説明を求めてゐるんぢやないんです」  
「でも、當世の日本で、一般にラジルに對して持つ知識は妾と同程度よ」  
「勿論。しかし、今の僕は、伯國に於ける邦人將來の發展性……と云ふ問題に、大きな關心を持つ様になつたのです」  
「まあ、六つか七のねえ、あなたは。そんな研究をして、論文でも書く氣なの？」  
「嫌んなつちやふな、お母あさんつたら。茶化しちやいけません。近頃、北米のカルフォールニア州に盛んに日本人が入り込んでゐるでせう？そして、比較的の生存競争激しくない植民地で累種一番奮闘して、今迄に多くの成功者を出してゐると云ふぢやありませんか。今、南米の伯國でも、日本移民を歓迎して、邦人發展の將來性は、實に有望であつて、北米のそれ以上ださうです。現に、近頃段々北米では、勤勉な日本人の入國を嫌ぶ様な氣配が見え出して來たらしく、そのためもあり、一層、今後伯國へ行く人達が多くなる譯です。競争の激しい日本内地で働く積りなら、南米で年たてば、大抵小さい乍らも、地主位にはなれるさうですから有望ひなしです。さあ、それで……」

「その事に言ひ及ぼうとして、思はず太い溜息をついた。  
「それで、あるいは？難ねえ、この子は……話の途中で溜息をついたりなんかしてさ」  
「さ、それがです。先方へ渡るには是非大金が必要なんです。大金がね」  
「それや勿論よ。此處から一萬數千里も距つてゐる所で、丁度日本とは地球の反対側の方にあら、と云ふぢやないの。たくさん船賃のかゝる筈よ」  
「え、二百圓位かゝるんですつてさ」  
「いくらくらかうらうと、妾達にや關係のない事よ。つまらん事を考へずに少しほは勉強なさい。もう、受験願書も提出せんやならん頃ですよ」  
「……」  
妻や平太郎を喜ばせておくれ。早く将校さんになつて、せめて末は、大將とまで行かなくとも佐官位までにはねえ……」

